

# 戦前の木曾川における発電所工事と朝鮮人労働者

広瀬 貞三  
(福岡大学人文学部教授)

はじめに

戦前の日本で、多くの朝鮮人労働者は各種土木工事に従事した。彼らは言葉もわからない土地で、自らの身体一つを武器に人生を切り開いていった。私はこの間、三信鉄道工事、太田川水系発電所工事、富士川水系笛吹川改修工事を取り上げ、朝鮮人労働者の労働と生活の実態を明らかにしてきた。今回は新たな事例研究として、木曾川水系木曾川（以下、木曾川）における発電所工事を取りあげる。

木曾川が発電所工事に注目するのは、以下の三点からである。第一に、木曾川には一九一一年から一九四五年まで、主に大同電力、日本発送電によって一四ヶ所の発電所が設置された点である。日本の河川の中で、一河川に短期間にこれだけ多くの発電所が設置された河川は木曾川しかない。日本の電力史ではこうした事例の一典型として、木曾川が最初に言及される。<sup>2</sup>第二に、この時期を前後して木曾川の東側の木曾山脈を越えた天竜川で発電所工事、天竜川の川岸に三信鉄道工事が行われていた点である。この三種類を合わせれば、大量の労働者（日本人、朝鮮人）が長野県・岐阜県のこの一帯に集合していたと思われる。第三に、木曾川発電所工事は近年「近代化遺産」として注目を集めている点である。しかし、それらは主に橋梁、発電所のデザイン・施工に関する関心だけであり、土木工事はほとんど関心外となっている。<sup>3</sup>ましてや、それらの工事に従事した労働者（日本人、朝鮮人）は全く視野に入っていない。

本稿では、木曾川における発電所工事の具体的な土木工事と労働者の関係を明らかにすることを目的とする。このテーマに関して注目されるのは、和田義昭編『可茂地域にある木曾川水力の歴史』<sup>4</sup>である。和田を中心とする発電所資料収集展示研究会は地域の貴重な史料（文書、写真、碑石）を多数発掘している。しかし、ここでも朝鮮人労働者への言及は全くない。このため、事実上、先行研究はないといえよう。

また、大同電力は一九三九年三月に国策の日本発送電に吸収・合併された。この後、日本発送電により木曾川では三つの発電所工事（兼山、三浦、御岳）が実施されるが、これらには日本人・朝鮮人労働者に加え、強制連行の朝鮮人、中国人が大量に動員された。本稿では主に大同電力の時期に限定することとし、これらの三発電所工事には言及しない。

## 一・木曾川水系発電所の設置

### (1) 福沢桃介の電気事業への参入

木曾川はその源を長野県木曾郡木祖村鉢盛山（標高二三三六m）に発する。古来から木材（ヒノキなど木曾五林）の産地として名高い木曾谷を南々西に流下し、落合川、中津川、付知川、阿木川、飛騨川等の諸川が合わさる。愛知県犬山市で濃尾平野に出て南西に流下し、笠松町で方向を南に変えた後、長良川と「背割堤」

を挟んで並流して、伊勢湾に注ぐ。流域面積五二七五平方km、幹川流路延長二二七kmの大河川である。<sup>5)</sup>

木曾川の電源開発に注目したのが、福沢諭吉の娘婿である福沢桃介(一八六八～一九三八)である。福沢は一八八九年にアメリカから帰国して、北海道炭鉄道に入社し、退社した後は実業界で活動した。福沢が電気事業と関係をもったのは、一九〇九年に名古屋電燈に投資して顧問になったことが始まりである。福沢は一九一〇年に取締役、次いで常務取締役となり、一九一二年に社長代理、一九一三年に社長に就任した。福沢は「一河川一会社主義」を唱え、木曾川での電源開発に本格的に着手する。一九一八年に名古屋電燈は電気事業製鉄鋼事業を行い、木曾川と矢作川水系の発電所設置のために木曾電気製鉄(福沢社長)を設置した。一九一九年一〇月に木曾電気製鉄は木曾電気興業と改称した。<sup>7)</sup>

## (2) 大同電力による電源開発

木曾川で大規模な発電所工事を行なう大同電力は、三つの会社が合同して成立した。第一に、前述した木曾電気興業である。第二に、大阪送電である。これは木曾電気興業の発生電力を大阪に送電するため、木曾電気興業の福沢と京阪電気鉄道の岡崎邦輔(一八五四～一九三六)が中心になり、一九一九年一月に設立された。第三に、日本水力である。これは一九一九年一〇月に山本条太郎(一八六七～一九三六)を社長として設立された。一九二二年二月に木曾電気興業、大阪送電、日本水力の三社合併によって、大同電力が設立された。大同電力の社長は福沢、副社長は宮崎敬介、常務は増田次郎など五名だった。大同電力は、第一に木曾川・矢作川水系の開発を進め、第二に傍系会社による水力開発を行い、第三に大阪、東京への送電幹線等を建設した。<sup>8)</sup>表1は戦前の木曾川における発電所工事である。最上流は御岳発電所であり、最下流は今渡発電所である。全体で一四カ所の発電所のうち、八ヶ所は大同電力が施工し、工事では飛鳥組が六ヶ所に参加している。また、図1は木曾川における各発電所の位置である。

大同電力の発電所工事を行なう工務部の幹部は、有村慎之助部長、石川栄次郎

表1・木曾川の発電所工事(1911～1945年)

番号	発電所名	運転開始	電力会社	出力(kW)	発電形式	主な施工会社
1	八百津	1911年11月	名古屋電燈	9,600	ダム水路	早川組
2	賤母	1917年7月	木曾電気製鉄	16,300	ダム水路	大倉土木、飛鳥組
3	大桑	1921年3月	大同電力	2,100	水路式	飛鳥組
4	須原	1922年5月	大同電力	10,000	水路式	飛鳥組
6	桃山	1923年11月	大同電力	24,600	水路式	飛鳥組、佐藤組
5	読書	1923年12月	大同電力	42,100	ダム水路	飛鳥組
7	大井	1924年12月	大同電力	48,000	ダム式	日本土木
8	落合	1926年2月	大同電力	14,700	ダム水路	飛鳥組
9	笠置	1936年11月	大同電力	41,700	ダム式	佐藤工業
10	寝覚	1938年9月	大同電力	35,000	ダム式	飛鳥組、佐藤工業
11	今渡	1939年3月	愛岐水力	20,000	ダム式	間組
12	兼山	1943年12月	日本送電	39,000	ダム水路	間組
13	三浦	1945年1月	日本送電	7,700	ダム式	間組
14	御岳	1945年6月	日本送電	66,000	ダム水路	鹿島組、間組、熊谷組

飛鳥建設社史編纂委員会編『飛鳥建設株式会社社史』上巻(同社、1972年)93～343頁、建設省中部地方建設局『木曾三川治水百年のあゆみ』(同局、1995年)498頁、その他から筆者作成。出力は1988年時点。



工した実績があった。また、この木曾川発電所工事で発電所施工の実績を積み、その後、鬼怒川水力発電所工事に参加した。<sup>15</sup>

工事は木曾川の上流から延長九六八三mの水路を建設、木曾川発電所で七五〇kWを得るものである。工事は一九〇八年一月に着工し、一九一一年六月に竣工した。長い水路工事は難工事だった。工事の内容は、「新たに水路を開鑿せんとする地盤の形勢たるや、一方は木曾川の水流に臨み、一方は山麓に接し、為に地質の脆弱なる個所にては屢々土石の崩壊起り、又取水口の如きは水事工事なることとて、往々出水に襲れ、土砂の埋設する処と成り、甚しきに至つては、將に成工に近づかんとせるを、雨後の奔流によつて浚ひ流され、積月の辛苦一朝にして水泡に帰せしめられたる如き事すらありき」という。最大の難所は第一隧道であり、岩盤の硬さや湧水のため進捗は思うに進まず、約四年を要した。また、電気関係の技術面でも、前例のない六〇kVの高圧送電となることから、その安全性に配慮した設計がなされた。<sup>16</sup> 完工検査の時、水車の欠陥と運転操作ミスが重なり、二名が死亡した。<sup>17</sup>

工事労働者に関して、「八百津は」木曾川と木材流しの拠点で、宿泊や食糧等が整っている部落であり、また、八百津の筏関係者を中心に労働力の確保も容易にできたと考えられる」との指摘があるが<sup>18</sup>、具体的な根拠は明らかでない。おそらく早川組の施工部隊が工事の中心を担当したであろう。この工事に朝鮮人労働者が参加したかどうかは不明である。工事竣工後、一九一〇年八月に水路工事に係わった早川組小頭一同は、「工事中死者之碑」を八百津町の善慧寺境内に建立した。<sup>19</sup> また、放水口発電所(一二〇kW)は完成した一九一七年六月に八百津発電所と改名された。<sup>20</sup>

## (2) 賤母発電所

木曾電気興業は八百津発電所よりかなり上流に、賤母発電所建設工事を開始した。取水口は長野県西筑摩郡吾妻村茅ヶ沢とし、発電所は同郡山口村字麻生である。水路は四七九四m、落差は四六・三m、出力一万六三〇〇kWである。水路

には隧道一四ヶ所、蓋渠五ヶ所、開渠一ヶ所を設置した。工事は一九一七年三月から一九一九年九月までである。使用したセメントは六万三六四二樽であり、延労働者数は六九万八九一名である。木曾電気興業の担当は、土木が杉山、山東兵蔵、電気が藤波、石田進一郎である。<sup>21</sup>

賤母発電所工事は、第一工区は林組・直営、第二工区は大倉組、第三工区は前田組、飛鳥組・直営・栗田組下請が受注した。<sup>22</sup> 第三工区の一部として飛鳥組(飛鳥文吉組長)が参加し、工事は高木治作部長が担当した。飛鳥組は飛鳥文吉が一九一六年五月に設立(資本金一〇万円)したばかりであり、いまだ資本金も技術力も脆弱だった。<sup>23</sup>

第二工区は大倉組が担当した。大倉組(現在の大成建設)の社史は、「折から第一次世界大戦たけなわのころで、好況のために人手不足が深刻であったが、半島出身者なども集めて工事にかかった」と、朝鮮人労働者の存在を明記している。大倉組は長野県賤母地点の対岸、岐阜県の坂下に大倉組土木部の出張員詰所を設けた。担当したのは、主任の斉藤忠郎、加藤一衛、稲田美代太郎、浅見詢二、横山才次、山崎定四郎、村田有朋だった。斉藤主任は「年譜」の一九一八年一月時点で、「物価愈々暴騰、米価四十八銭に達す。労働者に困窮しついに本年竣工せず遺憾限りなし」と記録した。<sup>24</sup>

工事施工中に飛鳥組の工事経験が会社側に認められ、第三工区担当の前田組は退き、飛鳥組が名義変更後にその分を直接契約した。労賃物価高騰のあたりを受けたが、飛鳥組だけは会社支持の姿勢で増金二割に不満も言わなかった。福沢社長はいたく感心し、竣工後の会合で初めて飛鳥組長と会い、その人物に傾倒したという。<sup>25</sup> これが契機となり、これ以降の木曾川の発電所工事は主に飛鳥組が受注することになる。

木曾電気興業が工事において最も苦心したのは水路工事だった。木曾電気興業の『賤母水力』はこの事情を次のように述べている。「賤母水力発電の計画を実行するに方り、最も困難であつたのは水路工事である。完成の後には殆んど総ての苦心は地中に埋められ、外面より之を窺ふことは能きないのであるが、啻に工

事の困難なりしのみならず、戦乱の余波を受けて物価労銀悉く大暴騰となり、請負者中には請負金の二割を増額したるに拘はらず、解約を要求したるものもあり従つて、会社の直営工事として完成し得たる部分もある」<sup>26</sup>つまり、困難は具体的な工事の中身と、経費の高騰の二つがあった。

また、労働者の状況を次に述べている。「工事は可成機械力に依り、人力は能き得る丈け之を省く方針を取れる為め物価が大変動を生じ従つて労銀奔騰の際に処しても、損害を比較的少くする事を得た。それでも約一千二百人の人夫、之に家族を合すれば、約二千余人の現場員がゐたので、此等の飯米を供給する為には余は少なからず苦心する処があつた」<sup>27</sup>つまり、労働者は一二〇〇名、その家族を含めれば、二千名が工事現場に集まつたのである。

工事の模様を『信濃毎日新聞』は次のように報じた。「花崗岩で出来た大きな山の中腹には何れも大きな洞穴が穿けられてその中から鼻を突くやうな煙硝の炬がもく、と湧き出して来る。其中を真っ黒になつた土工が平気で掘り取つた土砂をトロに積んで鼻誂もので二条の軌道を右往復に走らせて居る。トロは国道の下を縦横に貫かれた隧道によつて木曾川辺へ運び出され其処へ砂止めに積み上げられた堤防の裏詰に投出される。石を割る音トロの走る響きダイナマイトの爆発する響き、こうした戦場のやうな騒ぎが二里の間千五百人の工夫によつて到る所に演出されて居る」<sup>28</sup>こうした労働環境の下で、労働者（日本人、朝鮮人）は工事に従事したのである。

『坂下町史』は工事の様子を次に述べている。「工事中の難所は堰堤工事だった。このころは木曾川の水量多く、渇水期をねらつて左岸と右岸から少しづつ堰堤を伸ばしてゆくという工法で冬の寒い時期の工事となつた。しかもこの工事は堰堤の強度を保つために、川底を四、五mほど掘らなければなかつたのである。隧道もまた危険度の高い工事となり、地質によつて幾多のコース変更を余儀なくされたと言う。これらの危険度の高い仕事には朝鮮半島からの労働者が多く従事されていた」<sup>29</sup>朝鮮人労働者が危険な現場で従事していたのである。

### (3) 大桑発電所

大同電力は賤母発電所の上流に、大桑発電所を築造した。工事は一九一九年一月に着工し、一九二一年三月に竣工した。取水口は長野県西筑摩郡山口村、発電所は同郡大桑村野尻に設けた。堰堤は堤高六・九m、堤頂長一三〇・九mである。水路は三六二・一m、有効落差は三九m、出力は一万二〇〇kWである。当初予算では一kW当り建設費は六一九円だったが、最終的には六八九円に増額された。大同電力の担当は、土木が山東、石川、電気が黒岩純泰である<sup>30</sup>。使用した延労働者は大同電力が一万七七七一名、建設会社が五万八四一八名、合計六三万六一八九名だった<sup>31</sup>。

工事は入札で、大倉組、飛鳥組が参加した。飛鳥組の見積は一二七万円、大倉組は一三〇万円だった。しかし、大同電力は一二〇万円の金額を示して、飛鳥組に受諾を要請した。後に経費は上昇し、飛鳥組は増増を合計四回要求した。大同電力は二〇万円の増増を認めた。すると飛鳥組長はこの二〇万円を大同電力側に返金したため、会社側は驚いた。福沢社長は二〇万円を賞与金として加算し、次に予定している須原発電所工事を飛鳥組に特命で受注させることを約束した<sup>32</sup>。

工事には機械はほとんど導入されなかつた。『大桑村史』によれば、「当時は専ら人力で、いわゆる人海戦術により進められたのである。すなわち、隧道を掘るには「ノミ」で岩に穴をあけ「発破」をかけて碎き、掘り出された土や石は「もっこ」で担いで「トロッコ」に乗せて外に運んだり、またセメントを練るにしても人夫が「スコップ」による手練であった。こうしてすべてが人の手や肩によつてこの大工事が完遂されたのであり、これまた驚くよりほかにないものであるが、またその陰には多くの死傷者があつたことも忘れてはならないと思う<sup>33</sup>」という。工事を担当したのは飛鳥組の熊谷三太郎（一九八一～一九五一）部長である<sup>34</sup>。工事について熊谷の部下の牧田甚一（一九二二～一九八六）は、後に次のように回顧している。「大正八年には、熊谷さんが一生を通じてもつとも大きな転換期、あるいは躍進の原動力ともなつた木曾川筋大桑水力発電所の建設にと入るのである。いわば熊谷さんのこれからの「光輝ある一生」はこの大桑の水力工事によつ

て基礎のコンクリートがしっかりと打ち込まれたといえる。それほど大桑の工事は熊谷さんの一生を決定するのに、大きな役割を果たした重大なものであった。

熊谷さん自身もこの工事の重大性をはっきりと胸に刻みこまれていたのだと思う。強い決心をもって、熊谷さんはこの年の春頃からさかんに大桑の現場に行きはじめた<sup>35</sup>という。熊谷が苦勞した一つの問題は労働者の質だった。飛鳥組は北海道の工事と日本水力の勝原発電所工事が終了したため、それらの労働者を現場に送り込んだ。牧田は後に当時を、「にわかにならぬ」「飛鳥」組が大桑という大きな仕事を請負った為、人を集めるのにもどうしても無理ができてきた。いいとか悪いとかいつておられなかった。ともかく必要な量は補給しなければならぬ。そのため質のことまで手をまわすことができなかった<sup>36</sup>と回顧している。ただ飛鳥組の一部長であった熊谷にとっては、施工力、経済力を含め、飛躍する工事となった。熊谷の元には「金すじには錦竜、四俵、常山などという顔役がいて良く喧嘩をした<sup>37</sup>」という。

こうした極度の労働力不足を背景に、飛鳥組は大桑発電所工事に朝鮮人労働者を朝鮮から集団で導入した。これは木曾川の発電所工事に、朝鮮人労働者が従事する嚆矢となった。飛鳥組の社史は、朝鮮人労働者を集団に移入したのは、木曾電気興業の野尻発電所建設工事(大桑)(一九一九年四月着工)が最初だったと明記している。「第一次大戦以降内地の労働力不足補充のため、半島出身の建設労働者が次第に移入されていたが、組としては集団的多数を確保したのはこの工事が最初である。建設機械化の幼稚な時代であって、工事施工にはまだ人力を主体としていた。半島出身者がチギ(半島人の用いた背負い子)で背負って、険路を重たい物を運ぶ特技には、さすがの腕節自慢の連中もとても太刀打ち出来なかった<sup>38</sup>」という。「野尻発電所建設工事(大桑)」とは、大桑発電所工事を指すものである。

飛鳥組員だった牧田は後に、「はじめて朝鮮出身の土建労働者が集団的に入ってきたことも印象に残っている。(中略)朝鮮出身の労働者はチギで背おつて高いところに登つていった。この特技にはさすがに気の荒い日本の労働者もかなわ

なかつた。熊谷さんはこれらの朝鮮労働者にも細かい神経をくばって、よく面倒をみていた<sup>39</sup>と回顧している。

集団で朝鮮人を導入する際、主に日本語のできない朝鮮人を採用しようである。同時期の『信濃毎日新聞』はその理由を次のように述べている。「朝鮮人は日本人の二倍の仕事をするさうである。連れて来るには日本語など全然知らぬでなければ不可さうである。其うでないと金などを使ひ込まれたり、大金をかけて折角連れてきたのに逃亡されたり大損を招くからである<sup>40</sup>」。犯罪防止、逃亡防止のために日本語のできない朝鮮人が導入されたのである。


現場では一九二一年二月に日本人労働者の辻佐吉(二四歳)が同じ仲間である中山寅次郎(三八歳)を喧嘩の末に殺害した事件が起こった<sup>41</sup>。同年四月には現場でトロが転覆し、日本人労働者五名と小学生一名が重傷を負う事故が起きた。鎌田某(三九歳)が重傷を負い、他の五名(岩田友吉は二八歳、長尾兼兵衛は三二歳、同条之助は二〇歳、吉沢京治は三〇歳、和田武は九才)は軽傷を負った<sup>42</sup>。大同電力の一社員は現場で死傷事故を二件目撃し、次のように回顧している。「或日のことであつた。下出橋の橋台から、土方が四五人落ちて死んだ。其れは「ブレーキ」の無い「トロ」に乗って駅から発電所へ来る途中の出来事であつた。橋の手前の急勾配の所へ来ると、地球の引力の作用に依つて「トロ」は轟然たる響をたて々矢の様に走つた。元来「ブレーキ」が無いのだから危ないと思つてももう追付かない。(中略)一直線に岸から飛込んだ。これに乗つて居つた人は、之が為に大なる負傷をして、終に落命したさうだ。尤も、其の内の一人か二人は、九死に一生を得たとの話である。(中略)之も亦或日の出来事であつた。架線工夫が一人川に流れて死んだ。工夫は電話線の川越を行る為め、針金の川渡しを始めたのである。十間か十四五間、川上には下出橋がある。之を渡れば何でもないのであるが、自ら腰に針金を縛り付けて川の中に飛び込んだ。泳いで渡るつもりだつたらしい。川は何しおう木曾川の急流である。頭が一寸見えなくなつたかと思ふと、其れきり影も形も無い。遂に落命に及んだのである<sup>43</sup>。このような事故による死傷者は多数に上つたと思われるが、具体的な数は不明である。

#### (4) 須原発電所

大同電力は大桑発電所の上流に、須原発電所を設置することになった。工事は一九二一年初頭に着手し、一九二二年七月に竣工した。取水口は長野県西筑摩郡上松町登玉、発電所は同郡大桑村大字須原字太田である。水路は三九二九m、有効落差は三四・九m、出力は一万kWである。大同電力の担当は、土木が山東、電気が高坂釜三郎である。<sup>44</sup> 工事は福沢社長の約束通り飛鳥組が特命で受注し、今回も熊谷部長が担当した。<sup>45</sup> 熊谷は事務所を大桑村須原において工事にあたった。<sup>46</sup> 工事中の一九二二年五月、発電所で使用するセメントを運搬中だった船が転覆した。乗っていた朝鮮人の張有甲(三四歳)、金也順(四二歳)が激流に押し流され、行方不明となった。<sup>47</sup>

文学研究者浦西和彦によると、後のプロレタリア作家葉山嘉樹(一八九四～一九四五)がこの現場に就労したという。葉山は一九二三年一〇月六日頃、保釈が許可され、名古屋刑務所を出獄した。同年一月上旬に葉山は家族と共に須原発電所行き、宇野安組の帳付けとなり、須原堰堤修理工事に従事したという。<sup>48</sup> しかし、須原発電所工事は一九二二年七月までなので、この記述には疑問が残る。あるいは、葉山は竣工後の残務工事に参加したのかもしれない。

宇野安組とは宇野安太郎のことと思われる。木曾川の発電所工事では、大桑発電所から工事に関係した。宇野は「中森の安」と言い、名古屋では有名な顔役だった。宇野は福沢社長の愛人である貞奴との関係から工事に参加するようになった。宇野は工事への参加を認めてくれた大同電力の石川に恩義を感じ、後に石川の用心棒的な役割も果たした。<sup>49</sup>

須原発電所工事に土建労働者として働いた葉山は朝鮮人労働者について、次のように述べている。「殊に近年になつて、朝鮮の労働者が、その惨めな姿を日本中到處に現すやうになつた。中央沿線では、日本人労働者よりも遙に多い。彼等の生活は又酸鼻を極める。(中略) 彼等は、木曾川沿岸の水力電気工事に、どれだけ多くの労働力を捧げたか? これも後に述べなければならぬことである。木曾川のみでなく、殆んど至る處、水力に鉄道に、港湾に、道路に、最も

安価なる、豊富なる搾取材料として満ちてゐる。そして、アメリカに於て日本人労働者が排斥せらるゝやうに、彼等が日本人労働者のために、一種の競争者として、資本家に利用せられつゝあることも事実である」<sup>50</sup> このように木曾川の水力発電所工事が進展するに従い、大量の朝鮮人労働者が長野県内の工事現場に集中したのである。

しかし、その一方では朝鮮人労働者は強い団結心を見せながら、次第に工事現場で地歩を固めていった。同時期の『信濃毎日新聞』は、この様子を次のように述べている。「木曾には各種の工事が起つて居るので朝鮮人の土工も沢山入込んで居る。彼等の食物は至極粗末なもので内地人では却々出来ぬさうである。其れで居て働く事はよく働く。力があつて根気が強くて内地人の倍も二倍も働くといつて居る。其れに彼等には義理が強く復讐心も中々強い。一度親方なり其の仲間なりが他から侮辱迫害を受けると必ず復讐する。丁度昔其仇敵を探して六十余州を歩き廻り草の根を分けて仇を見つけ出して仇討をしたやうに朝鮮大工も何処までも仇討をする心が燃えて居るさうである」<sup>51</sup>

こうした朝鮮人の強い団結心を示す事件が一九二二年四月、現場で発生した。姓名不詳の朝鮮人土工が朝鮮人の親方金徳守の飯場に来て、「一円六〇銭を貸してくれ」と要求した。これを金徳守が断ると、相手が大声を出したので、金徳守の子分である朝鮮人の林一郎(二七歳)が対応した。すると、相手は匕首で林一郎の左腕に切りつけた。さらに金徳守の子分である朝鮮人の李明守(二〇歳)がこれに加勢すると、さらに相手は匕首で彼の腹部を突き刺し、重症を追わせた。<sup>52</sup> この時点で朝鮮人労働者の数は、三〇〇〇〜四〇〇〇名だった。<sup>53</sup>

長野県庁の史料は、「大正十年ヨリ十二年ニ至リ西筑摩郡木曾川流域ニ大同電力株式会社ガ施行シタル発電所工事ニシテ其ノ際稼働ノ鮮人盛事五千人ヲ算セリ」<sup>54</sup>と、約五千名の朝鮮人が木曾川の発電所工事に従事したと記録している。工事の期間を見ると、賤母発電所、大桑発電所、須原発電所、後述する読書発電所、桃山発電所が該当する。これらの発電所工事には大量の朝鮮人労働者が就労したと思われる。

## (5) 桃山発電所

大同電力は須原発電所の上流に桃山発電所を築造した。桃山の名前は福沢社長の名に因んで命名された。工事は一九二二年八月から一九二三年九月までである。取水口は長野県西筑摩郡上松町大字萩原字小野ヶ谷で、発電所は同字登玉である。有効落差は七九・五m、出力は二万四六〇〇kWである。堰堤は堤高五・七m、堤頂長は八五・四mである。大同電力の担当者は、土木が衣川清一、電気が高草である。使用した労働者は延三六万六五六六名で、工事費は七二七万四五八円である。<sup>55</sup>

工事は飛鳥組と佐藤組が受注した。飛鳥組で工事を担当したのは熊谷部長である。熊谷は「現場が須原の少し上流であったので、此月〔五月〕須原水力工事は終わったが、須原の事務所をそのまま残して置いた」という。熊谷部長の下で須原発電所工事の施工部隊が、ここに移動してきたと思われる。佐藤組の工事は一九二二年一月から一九二三年七月までで、請負金額は一八五万五千円だった。<sup>57</sup> 桃山発電所工事で佐藤組は初めて木曾川の発電所工事に参加した。

一九二二年一〇月、現場で朝鮮人労働者一〇〇余名は利益金分配のことで二手に分れて喧嘩の状況となった。このため、中村福島警察署長は警部補、部長以下数名の巡査を急派し、非常警戒をしたため喧嘩にはならなかった。<sup>58</sup>

## (6) 読書発電所

大同電力は賤母発電所の上流に読書発電所を設置した。工事は一九二二年三月から一九二三年二月までである。木曾川本流、阿寺川、柿其川から取水した。本流の取水口は西筑摩郡大桑大字村野尻字上ノ島、発電所は同郡読書村島田である。有効落差は一・二・一m、水路は二万七五五m、出力は四万二一〇〇kWである。本流の堰堤は堤高六m、堤頂長一一・二・七mである。工事では延一七五万六〇〇〇名と大量の労働者を動員し、六〇万袋のセメントを使用した。この工事は「当時未曾有の大工事」といわれた。<sup>59</sup> 工事は飛鳥組が受注し、担当は熊谷部長である。熊谷は事務所を同郡読書村三留野におき、熊谷、牧田、高宮義

雄などが工事にあたった。<sup>60</sup>

工事中の一九二二年一二月、大祠の六本松第九号の隧道で、工事中に鶴嘴が雷管に触れて爆発した。労働者の町田沢三郎(一七歳)、森嶋磯吉(一七歳)、鶴田千三(一七歳)の三名が負傷した。後に治療中の町田沢三郎が死亡した。<sup>61</sup> 一九二三年二月にもダイナマイトの事故が発生した。第四隧道で岩石中の不発弾一個が鶴端に触れたために爆破し、上沢金一(一九歳)、露久保三郎(二五歳)、大谷権吉(三七歳)、大塚義造(三二歳)、佐藤伝之進(三二歳)の五名が重軽傷を負った。<sup>62</sup> 朝鮮人労働者の負傷者は明らかではない。

一九二三年五月、第三工区七号隧道入口から二〇間(約三六m)の地点で土砂崩落が発生した。労働者二四名は隧道の奥の推定二一六mの地点に逃げ込んだが、生き埋めになった。熊谷部長は三〇〇余名を動員して救助活動を行なったものの、救出は困難だった。掘り返すことはできなかったが、空気を送る鉄管が一本潰れないで残ったので、それを通して水と食糧を送った。<sup>63</sup> 二日後に無事全員が救出された。「雨の降る夜中に隧道の口許で安否を気関つて迎へに来て居た兄弟分や家族の者と互いに抱合つて其無事を喜び合ひ中には涙を流して嬉し泣きに泣いた者もあつた」という。四二名の民族別数は明らかではない。

一九二三年七月、木曾谷は連日の集中豪雨を受けた。最も大きな被害を出したのは、長野県西筑摩郡大桑だった。現地ではこれは朝鮮人労働者が蛇を殺害したためだとの流言が広がった。「七月」一四日のことである。大同電力の工事で同村に入り込んで居た朝鮮人が工事の途中フト鶴嘴の先から掘り出したのは大きな蛇の巣であつた。中には蛇は崇なるものである之を放つてと云ふ者も居たが彼等の多数は之を殺す方に意を傾けたので数知れない蛇は御子兄弟諸共彼等の鶴嘴の露と消へたのである。ところがその夜、同村のある人の夢枕に一人の龍神が現れ、蛇を殺した報いに「二四日まで大桑村を全滅させる」と告げたという。<sup>65</sup> 朝鮮人に対する差別意識がこのような流言を生んだのである。



## (7) 大井発電所

大同電力は賤母発電所の下流に大井発電所を築造した。大井発電所は木曾川における最初のダム式発電所である。日本で最大の高堰堤建設であるため、大同電力は畠山好伸技師をアメリカに派遣し、ハイダムに関する施設を調査させた。大同電力はアメリカの建設会社シーボー・スター・アンダーソン社と技術提携を行なって、技術顧問団四名を招いた。また、大量の機械（コンクリートミキサー、ガソリン機関車、スチームショベル等）を導入して進めた大工事だった。工事は一九二二年七月に着工し、約三年後の一九二四年一二月に竣工した。大井ダムは重力式コンクリートダムで、堤高五三・三m、堤頂長二五七・七m、堤体積一五万三千 $\text{m}^3$ であり、テンダーゲート二一門が設置された。出力は四万八二〇〇kWである。工費は約一九六二万円であり、延労働者数は一四六万人である。大同電力の担当者は、土木が佐野藤次郎、畠山、石川、電気が差益猛男、黒岩純泰である。大工事であるため犠牲者は多く、死者は三二名である。<sup>66</sup>

土木を担当した佐野藤次郎（一八六九〜一九二九）は一八九一年に帝国大学工科大学土木工学科を卒業後、大阪市技師となり水道事業に従事した。一八九六年に神戸市技師（後に水道工事長）となり、神戸市水道の基礎を築いた。特に佐野は一八九九年に竣工した上水道専用ダムである布引五本松ダムを設計した。これは日本初の重力式コンクリートダムだった。佐藤は一九〇六年に神戸市嘱託のまま韓国政府に水道工事管理嘱託として招聘された。その後、衛生工事課長として朝鮮で四水道工事（漢城、釜山、平壤、仁川）を担当した。<sup>67</sup>初代所長の佐藤は山砂の使用をめぐる寺沢寅雄土木課長と対立して途中で辞め、第二代所長に畠山が就任した。この時、石川が次長で現場に入った。<sup>68</sup>

ダムの堤体だけは直営とし、他は請負となった。工事は日本土木、宇野組、並木組、戸田組が受注した。主に工事は日本土木（大倉土木組から一九二〇年一二月に改称）があたった。日本土木は大西進が主任となり、増山鉄雄、佐藤隼次、山田諒、酒井茂平が担当した。工事では一部に実費生産方式、一部に総括請負方式が採油された。<sup>69</sup>

大井発電所工事にはこれまでの木曾川の発電所工事とは比較にならない大量の労働者が必要だったと思われる。おそらく新たに日本土木の施工部隊が加わり、それ以外はこれまで木曾川の発電所工事に従事していた労働者が参加したと思われる。大井ダム建設により、地域社会は大きな変化を受けた。『恵那地域誌』はその変化を次のように述べている。「建設工事はさほど機械化されていなかったのでも、各所とも一日数百人の労働者を必要としたし、機械・資材の運搬などにも多くの人力を要した。地域に滞留する余剰労働力にとって絶好の就労・現金収入の機会であった。また他地域からの労働力の流入も激しかったので、商店、飲食店、旅館などのサービス業も増大した」。申原村の場合、一九一七年に二七六一名の人口が工事終了直前の一九二二年には三〇九九名と三三八名も増加し、一九二七年には再び二七一六名に減少した。<sup>70</sup>

労働者が多数流入したため、帯同した子どもが学校に入学した。笠置第二尋常高等小学校には児童の入学が続いた。一九二二年の同校の日記には、「大同水力電気工事ノタメ四月以来、外来児童一九名（中略）児童総数一六二名」とある。学校への転入者も多く、一九二三年に児童数は一九二名となった。この数は同校にとって戦後の混乱期以外にはない高い数だった。<sup>71</sup>これらの児童の民族別の数は明らかではない。

工事現場では一九二二年二月に砕石工場で出火した。また、一九二三年九月にはダム工事労働者が腸チフスにかかり、隔離病舎へ収容された。<sup>72</sup>

ダムの犠牲者を慰霊するため、大井ダムの右岸に福沢の書により「工難覚霊塔」が建立された。碑文には「工大ナレバ難亦多シ。之ヲ人事ニ見ルニ、工期三年其ノ間工難ニ遭ヒ命ヲ殞セシモノ三十有余名ヲ数フ。激流大河ノ難ニ遭ヒテ此ノ大工事ヲ成ヌヲ得シモノ、素ヨル地ノ利ト人ノ和ニヨルモノナリト雖モ、是等犠牲者ノ貢献ニ待チシモノ極メテ大ナリ」<sup>73</sup>と書いてある。慰霊塔への寄付は、大同電力が三〇〇円、同社社員有志が五七八円五〇銭、大倉土木が二〇〇円、宇野組が百円、梅原国蔵が百円、石井栄次郎が五〇円などである。<sup>74</sup>宇野組とともに、梅原国蔵、石井英次郎等が実際に施工を請負った建設業者であろう。

建立時には背後に大きな建物があり、工難覚霊塔の周囲は鎖で囲われている。<sup>75</sup> 二〇一八年八月現在、工難覚霊塔の前の右側に石碑(設置年月は不明)があり、「工難者氏名」三二名が刻まれている。風雨によりかなり磨耗しているため、判読が難しい。しかし、この中には朝鮮人である崔某、朴某の名前が見える。<sup>76</sup> これにより、大井発電所工事に朝鮮人労働者が従事していたことは明らかである。

### (8) 落合発電所

大同電力は大井発電所の上流に落合発電所を築造した。工事は一九二五年四月に着工し、一九二六年一月に竣工した。発電所は岐阜県恵那郡落合村字森ヶ鼻であり、取水口は同村同字である。直線式コンクリートダムを築造し、テンダーゲート一八門を設置した。落合ダムは堤高三・一m、堤頂長二五・一mである。有効落差は二二mで、出力は一万四七〇〇kWである。<sup>77</sup> 工事は飛鳥組が受注し、施工は熊谷部長が担当した。熊谷は事務所を岐阜県恵那郡落合村に置き、高宮主任、宮川順三郎、辺捨土を常駐させて工事に当たった。<sup>78</sup>

作家葉山嘉樹はこの現場で土建労働者として働いた。葉山は一九二五年三月に巢鴨刑務所を出所し、この現場に入った。葉山は同年二月、「雪の降り込む廢屋に近い、土方飯場で『セメント樽の中の手紙』を書いた」<sup>79</sup>という。葉山は発電所堰堤基礎工事の常山班に就業し、飯場に住んでいた。<sup>80</sup> 葉山は一九二六年三月、日本人労働者と朝鮮人労働者の関係を、次のように語っている。おそらく落合発電所の現場を示していると思われる。「飯場は三つあった。その中の一つは日本人飯場で、二つは鮮人飯場であった。けれども、日本人飯場も、鮮人飯場も構造はずつかり同じだった。(中略)朝鮮の労働者と、日本の労働者と兄弟分の杯をしてゐる者も沢山あった。又、親分子分の杯を交わしてゐる者も沢山あった。稀には、日本の労働者が朝鮮の労働者を侮蔑した。或いは朝鮮の労働者が侮蔑されたと考へて、始められる悲しむべき喧嘩もないではなかつた。さう言う場合は多くは「大和魂」を持った日本の労働者の方が負けになるのであつた。恐ろしいものである。鮮人労働者は、自ら意識しない、反抗心を根強く持つてゐた。彼等は

若し喧嘩に負けたら、自分と同じ民族、同じ郷土が侮蔑されると考へない訳には行かないのであつた」という。<sup>81</sup> この時点で落合発電所工場の飯場数から見て、日本人労働者より朝鮮人労働者が多かったのである。木曾川発電所工場の開始直後(賤母発電所工事)には日本語もできなかった朝鮮人労働者は日本人労働者との激烈な「喧嘩」を通じて勝利を重ね、約六年後には独自の勢力を築くまでに成長したのである。

### (9) 笠置発電所

大同電力は大井発電所の下流に笠置発電所を築造した。工事は一九三四年一月に開始し、一九三六年一月に竣工した。発電所は岐阜県加茂郡飯地村字岩浪で、取水口は右岸の同村同字に設けた。堰堤は直線式コンクリートダムで、堤高三九・二m、堤頂長一五四・九mである。有効落差は二九・四mである。最大出力は当初は三万五五〇〇kWだったが、竣工の翌年に使用水量を増加し、四万五千kWとなった。大同電力の担当者は土木が石川、電気が高坂である。工事ではセメント八万七千袋、鉄材三千t、延労働者一四万五千名を使用した。数度の大洪水に見舞われ、特に一九三五年の洪水では堰堤仮締切を流失し、夏には大洪水のため放水路仮締切が破壊された。工事での負傷者は一三〇〇名であり、一九名が死亡した。<sup>82</sup>

工事を受注したのは佐藤工業である。<sup>83</sup> 一八六二年に初代佐藤助九郎が富山県で佐藤組を創業し、一九三一年に組織を改めて佐藤工業(資本金二〇〇万円)を設立した。佐藤工業はこの工事に先立ち、富山県、石川県などで水力発電所工事を受注した経験を持っていた。工事の請負金額は二三八万八千円である。佐藤工業の組員の「中島又作覚書」によれば、工事の担当部長は今村弥三郎で、担当は八田義正、中島又佐、井上善作、福島健一、四万小平など一九名、配下は鷹栖要、高田恒興、喜田興作、前山外次、大井栄太郎など一六名である。<sup>84</sup> 部長の今村について、佐藤欣司(一九〇九〜一九九二)は次のように述べている。「五尺たらずの彼は智恵のかたまりのような男で、業界でも相当名声をはせていたらしい。小

学校だけの学歴で、あとは現場経験と独学でできずきあげた人で、現場で三軍をしつたする時以外は、常に何かを考えていて良く忘れ物をする。(中略) 彼には大学を出るまで、合うたびに何かと質問せめにあった。すぐ手帳に書くのでうかつなことはない。」<sup>85</sup>

現場では大量の労働者を集めて工事を行なった。佐藤工業の施工部隊に加え、これまで木曾川の発電所工事に従事していた労働者(日本人、朝鮮人)が参加したと思われる。大同電力の石川は後に工事の様子を次のように回顧している。「高い所から工事現場の河原を見ると、黒ゴマを播いた様な人の数であった。

人の山で埋めつくされたような壮観であった。思わず「ワーツ」と溜息とも何ともつかぬ声が洩れてくるのであった。(中略) 仕事は十二時間勤務で二交代制であった。人を以て埋めると豪語した今村(弥三郎)は、この笠置の飯場に二千人近い人夫を注ぎこんだ。二交代制の二十四時間作業なので人夫の数は二千人であった。宿舎はその半分の一千人分しか用意しなかった。なぜなら、一千人は絶えず夜か昼の違いはあつても、交代で働きに出ているのだから、宿舎で休む者は、十二時間の勤務を終つて来た半分の千人だけであつたからだ。これで間に合つていた。」<sup>86</sup>

工事中の様子を、『笠置村誌』は次のように記録している。「専ら文明の利器を応用し、「井之尻」停車場の付近には、事務所一棟・倉庫数棟・工務用付属建物数棟・従業員の舎宅・同合宿所・巡査駐在所等が建設せられ、木曾川沿岸各所には、土工の宿泊すべき飯場を仮設し、店舗が開かる、等、一時は千余名の土工に滞留せられて、頗る混乱且つ殷賑を極めたものであった。」<sup>87</sup> ここでは一千名の労働者となっている。

工事現場の宿泊所は岩浪の現場上部や岩浪橋近くや下河合の工事事務所北側に二階建ての宿泊所が建てられた。工事現場付近の急傾斜地にはかけ屋作りの宿舎が斜面に張り付くように建てられた。二千人の労働者に千人分の宿所しか用意がないことには無理があつた。天候不順で働けない日も多くあり、休む場所がない人で溢れることもあつた。このため、会社のセメント倉庫の一部を借り、セメン

ト袋と一緒に長雨をしのぐこともあつた。<sup>88</sup> 工事関係者は河合地域内の一般農家に間借りする者もあり、河合の人口は増加した。第三尋常高等小学校の児童数は一九三六年に一七七名(尋常科)となり、これは同校が戦後統合されるまでの最大数だった。<sup>89</sup>

工事の犠牲者一九名を慰霊するため、一九三七年三月、「殉職慰霊碑」が建てられた。碑文には「特二身ヲ以テ貢献セラレタル十有九英霊絶儔ノ蹟續ニ待ツ」とある。犠牲者の中で、日本人と朝鮮人の数は明らかではない。

#### (10) 寢覚発電所

大同電力はこれまでの木曾川発電所工事の中で、最上流に寢覚発電所を築造した。工事は一九三六年一月に着工し、一九三八年九月に竣工した。木曾川本流、支流の大瀧川、小川から取水し、三本の隧道(大瀧川線は延長三四一六m、木曾川線は二三八三m、小川線は一八九五m)で寢覚発電所(長野県西筑摩郡上松町字北野)に送水した。有効落差は六四・四mで、出力は三万二六〇〇kWである。

使用したセメントは七七万袋、ダイナマイト二四〇t、鉄材二五〇〇t、延労働者一三六万人である。送電は東京、大阪への双方を想定し、五〇サイクル、六〇サイクルの双方で設計した。大同電力担当者は、土木が石川、電気が高坂である。工事では三八名が死亡した。<sup>91</sup> 民族別の死者数は不明である。工事は四工区に分けられ、第一、第二、木曾川工区は飛鳥組が受注し、第三工区は笠置発電所に続いて佐藤工業が受注した。工事では一九三八年二月に木曾川工区で岩盤が崩壊し、一二名が生き埋めになった。七名は救助されたが、五名が死亡した。<sup>92</sup>

工事の大部分は飛鳥組が受注し、熊谷部長が担当した。作業所を長野県西筑摩郡福島町神戸に置き、竹内善五郎、時岡収次が常駐して工事に当たった。また熊谷の息子である熊谷太三郎(一九〇六―一九九二)もほとんど常駐した。現場は牧田が見回った。<sup>93</sup> 大同電力の一技師は当時を、「時どき工事現場を先代の熊谷三太郎社長が、今の熊谷(太三郎)先生やお亡くなりになった牧田会長、時岡副社長とご一緒にみてまわられるのを、自分は何の気もなくながめていた」と回顧し

た。熊谷部長の下の配下は、堰堤が村田、隧道は上から伊藤、田島、錦竜、山崎、永井である。サイホンは岩手屋、隧道は稲葉、長浜、松田、田中である。木曾川の堰堤は河井、隧道は福光、播磨だった。<sup>95</sup>

佐藤工業の工事は一九三六年五月から一九三七年五月までであり、請負金額は一六一万五千円だった。佐藤工業の組員の「中島又作覚書」によれば、部長は今村弥三郎で、担当は八田義正、中嶋条次、青木芳雄、塚本豊蔵、中島又佐など二一名、配下は林佐之治、御旅屋佐七郎、高田恒興、高田宇一郎、斉藤力造など一六名だった。<sup>96</sup>

### (11) 今渡発電所

今渡発電所は木曾川と飛驒川の上流の発電所から調整放流される水を、合流地点で自然流量に還元逆調整するためのものである。木曾川には大同電力の発電所群、飛驒川には東邦電力(松永安左工門社長)の発電所群があるため、対立する両社は経費を削減するために共同出資をして、一九三五年七月に愛岐水力(松永社長)を設立した。<sup>97</sup> 工事は両河川の合流地点直下に堤高二二m、堤頂長三〇八m、有効落差一二・二mという低落差の重力式コンクリート堰堤を築く。ここで二万kWを得るものである。<sup>98</sup> 愛岐水力の建設所長は山東、土木課長が大村良、堰堤係長が山口利兵衛、発電所係長が山口最一郎だった。<sup>99</sup> この背景には一九三二年に須原ダムが一部決壊したため、内務省は大井ダムの補強命令を発していた。これを受けて愛岐水力の設立が行われた。今渡ダムの自然水量は一〇〇m<sup>3</sup>/秒であり、これを基準流量と規定した。<sup>100</sup>

工事は東邦電力の工事を長く担当していた間組が特命で受注した。間組は一八八九年四月に間猛馬が福岡県門司で設立した。工事は一九三六年一月一月に起工し、一九三九年一月に竣工した。間組は岐阜県可児郡今渡町字西野に日本ライオン出張所を置いた。工事を担当したのは、業務監督(兼任)藤木誠一、主任心得小川蔵夫、次席小田栄太郎である。工事ではケーソン工法による基礎工事に設計変更を行った。<sup>101</sup> この工事の前に間組は飛驒川で名倉発電所工事(一九三六年

一〇月竣工)を行なったので、<sup>102</sup> その施工部隊が移動してきたと思われる。

今渡発電所工事に関して、日本人は次のように回想している。「土木工事は、その当時としては最も進んでいるといわれたスチームシャベルを使つたが、わしは発電所の中のモーターの据え付けをしとった。それで土木工事はようやく知らんが、ダムから落ちて死んだり、機械に巻きこまれたり、何人かの犠牲者をだしておった。その人たちの中には、朝鮮人もいたそうかな。犠牲者のための慰霊碑が近くに建てられとるよ」。<sup>103</sup>

労働者の中にどれぐらいの朝鮮人が含まれていたかは明らかではない。しかし、かなり大量の朝鮮人がいたと推定できる。一九三九年三月に大同電力などの民間電力会社を合併・吸収し、国策の日本発送電が設立した。日本発送電は大同電力の木曾川水力発電所建設計画を引き継いだ。日本発送電は今渡発電所の上流に兼山発電所(岐阜県加茂郡八百津町大字和知)を築造した。工事は一九三九年五月に開始し、一九四三年二月に竣工した。施工は間組である。殉職慰霊碑によれば、一八名が犠牲者となり、この内で二一名は日本人、七名は朝鮮人である。

この犠牲者数から見ると、兼山発電所工事には大量の朝鮮人がおり、それらはおそらく今渡発電所工事の終了後、間組の施工部隊として移動してものと思われる。<sup>104</sup> 今渡発電所工事の犠牲者は一三名であり、木曾川左岸に慰霊碑が建てられた。<sup>105</sup> 二〇一八年八月現在の慰霊碑は、小さな石塔が三基、仏塔が一基である。これらには犠牲者の氏名は刻まれていない。<sup>106</sup>

### おわりに

以上、本稿で述べたことを要約すれば、次の通りである。

大同電力系会社や大同電力(一九二二年設立)は一九一一年から一九三九年まで、木曾川に二ヶ所の水力発電所を次々と設置していった。一発電所のうち、大同電力は八発電所を設置した。このうち六発電所(大桑、須原、読書、桃山、落合、寝覚)を飛鳥組が受注し、この中で五発電所を熊谷三太郎部長が担当した。おそらく熊谷部長の配下やその統率下にある労働者(日本人、朝鮮人)は一団と

なって木曾川を移動しながら、発電所工事に従事したと思われる。

木曾川の発電所工事に、初めて朝鮮人労働者が現れたのは賤母発電所（一九一九年竣工）である。その後、大桑発電所（一九二一年竣工）には建設業者の飛鳥組によって、朝鮮人が朝鮮半島から集団で導入された。当初は日本語のできない朝鮮人を意図的に導入したようである。続いて、須原発電所（一九二二年竣工）、桃山発電所（一九二三年竣工）、読書発電所（一九二三年竣工）、大井発電所（一九二四年竣工）、落合発電所（一九二六年竣工）、今渡発電所（一九三九年竣工）に、朝鮮人労働者が就労したことが確認できる。つまり、木曾川における一一発電所のうちで八発電所工事に朝鮮人は建設労働者として従事した。

木曾川の発電所工事に従事した朝鮮人労働者数は、一九二一～一九二三年には長野県内だけでも約五千名に達した。大桑発電所工事に集団として導入された朝鮮人は強い団結心によって日本人労働者と戦いながら、地歩を築いていった。わずか六年後の落合発電所の工事時には大規模な朝鮮人飯場が形成され、現場での「喧嘩」によって日本人労働者を圧倒するまでに成長した。

発電所工事における犠牲者は、大井発電所（一九二四年竣工）が三一名、笠置発電所（一九三六年竣工）が一九名、寢覚発電所（一九三八年竣工）が三八名、今渡発電所（一九三九年竣工）が一三名である。民族別の死亡者数は明らかではない。

このように短期間で大規模な木曾川における発電所工事には、日本人労働者と共に朝鮮人労働者が多数参加したのである。

1 広瀬貞三「三信鉄道工事と朝鮮人労働者―『葉山嘉樹日記』を中心に」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』四号（二〇〇一年三月）、同「太田川水系発電所工事と朝鮮人労働者」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』九号（二〇〇六年六月）、同「戦前の富士川水系笛吹川改修工事と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』四八巻一号（二〇一六年六月）。

2 水力技術百年史編纂委員会編『水力技術百年史』（電力技術土木協会、

一九九二年）一〇〇～一〇二頁。

3 小寺武久「木曾川桃山水力発電所の建築について」『日本建築学会計画系論文集』一九九一年九月号、同「木曾川における一九二〇年代及び三〇年代の一連の発電所建設のデザインについて」『日本建築学会計画系論文集』一九九四年五月号、鈴木静夫『木曾谷の桃介橋』（N T T出版、一九九四年）、竹林征三『湖畔に刻まれた歴史』（山海堂、一九九六年）、八百津町・八百津町教育委員会『岐阜県重要文化財旧八百津発電所保存修理事業報告書』（同会、一九九八年）、伊東孝『日本の近代化遺産―新しい文化財と地域の活性化』（岩波書店、二〇〇〇年）、茂吉雅展『水燃えて輝く―木曾川の水力発電開発を中心に』（岐阜新聞社、二〇〇九年）。

4 和田義昭編『可茂地域にある木曾川水力の歴史―国指定重要文化財・近代化産業遺産の旧八百津発電所を中心に・第一回改訂』（八百津町教育委員会・発電所資料収集展示研究会、二〇一三年）。（以下、『木曾川水力の歴史』とする）。

5 建設省中部地方建設局『木曾三川治水百年のあゆみ』（同局、一九九五年）五～六頁。木曾川の流筏、漁業、河川交通等については、木曾川文化研究会『木曾川は語る―川と人の関係史』（風媒社、二〇〇四年）参照。

6 大西理平『福沢桃介翁伝』（福沢桃介翁伝編纂所、一九三九年）参照。

7 大西理平編『大同電力株式会社沿革史』（同人、一九四一年）一〇～一五頁。また、大同電力については、三宅晴輝『電力コンツェルン読本』（春秋社、一九三七年）

三二一～三六四頁参照。木曾電気製鉄については、浅野伸一「木曾川の水力開発と電気製鉄製鋼事業―木曾電気製鉄から大同電力へ」『経営史学』四二巻二号（二〇一二年九月）参照。

8 関西地方電気事業百年史編纂委員会『関西地方電気事業百年史』（同会、一九八七年）一七六～一七八頁。

9 前掲書『大同電力株式会社沿革史』六八頁。

10 前掲書『大同電力株式会社沿革史』七三～七四頁。杉山栄については、馬場籍生『名古屋新百人物』（珊瑚社、一九二二年）六二～六三頁参照。石川栄次郎

- については、有吉天川・出口啓輔『流れとともに―石川栄次郎伝』(輿論次代社、一九五五年)参照。(以下、『流れとともに』とする)。藤波収については、河野幸之助『藤波収』(日本時報株式会社出版局、一九六〇年)参照。
- 11 増田次郎については、前掲書三宅晴輝『電力コンツェルン読本』一五八―一六三頁、増田完五『増田次郎自伝』(同人、一九六一年)参照。
- 12 岐阜県編『岐阜県史・通史編・近代下』(同県、一九七二年)六二六―六二七頁。
- 13 山根巖『明治末期における岐阜県下2つの水力発電用水路橋について―湯之洞水路橋(美濃市)と旅足(たびそこ)』川水路橋(八百津町)、『土木史研究』一七号(一九九七年六月)一七八―一八一頁。
- 14 植村諤一編『名古屋実業界評判記』(同発行所、一九一五年)九六―一〇〇頁。
- 15 前掲論文山根巖『明治末期における岐阜県下2つの水力発電用水路橋について―湯之洞水路橋(美濃市)と旅足(たびそこ)』川水路橋(八百津町)一七八―一八一頁。
- 16 名古屋電燈『名古屋電燈株式会社社史』(中部電力株式会社能力開発センター、復刻、一九八九年)一八〇頁。原本は一九二七年に刊行された。中部電力電気事業史編纂委員会編『中部電気事業史』上巻(同社、一九九五年)六四頁。工事の詳細は、名古屋電燈株式会社・早川組『名古屋電燈株式会社木曾川第一水路工事写真帖』(同社、一九一一年)、名電『名電 木曾川水力電気工事中真景』(同社、不明)、東邦電力『昭和七年、八百津発電所及び放水口発電所』(同社、不明)参照。以上の三冊の一部は、前掲書『木曾川水力の歴史』に引用されている。
- 17 社史編纂会議委員会編『時の遺産―中部地方電気史目録集』(中部電力、二〇〇一年)二五〇頁。八百津発電所は一九五四年に丸山発電所が完成すると、丸山ダムから分水発電を行なったが、一九七四年に老朽化のために発電を停止した。現在は旧八百津発電所資料館として公開されている。前掲書『木曾川水力の歴史』二四―二六頁。
- 18 前掲書『木曾川水力の歴史』一五頁。
- 19 前掲書『木曾川水力の歴史』二〇頁。
- 20 前掲書『木曾川水力の歴史』八頁。
- 21 前掲書『大同電力株式会社沿革史』九三―九六頁、前掲書『関西地方電気事業百年史』一七九―一八〇頁。工事の詳細は、木曾電気興業『賤母水力』(同社、一九二〇年)、日本動力協会の編『日本の発電所―中部日本篇』(工業調査協会、一九三七年)三六五―三六八頁参照。
- 22 前掲書『賤母水力』五―六頁。
- 23 飛鳥建設の社史は、第一工区は山本組、第二工区は大倉組、第三工区は前田栄次郎と記している。前掲書『賤母水力』の記述と少し異なる。飛鳥建設社史編纂委員会編『飛鳥建設株式会社社史』上巻(同社、一九七二年)七一―七三頁。
- 24 社史発刊準備委員会編『大成建設社史』(大成建設、一九六三年)一九八―一九九頁。
- 25 前掲書『飛鳥建設株式会社社史』上巻、七一―七三頁。
- 26 前掲書『賤母水力』五―六頁。
- 27 前掲書『賤母水力』二二頁。
- 28 信濃毎日新聞社編『信濃毎日新聞に見る一一〇年―明治・大正編』(同社、一九八三年)八七八頁。
- 29 岐阜県恵那郡坂下町町史編纂会編『坂下町史―平成一六年度版』(同会、二〇〇五年)四八一頁。
- 30 前掲書『大同電力株式会社沿革史』九六―九八頁、前掲書『関西地方電気事業百年史』一八〇―一八一頁。工事の詳細は、大伏節編著『大桑発電事業誌』(大同電力、一九二六年)参照。これは全七〇二頁であり、記述は詳細である。
- 31 前掲書『大桑発電事業誌』四一七―四一八頁。
- 32 前掲書『飛鳥建設株式会社社史』上巻、七七―八〇頁。
- 33 大桑村『大桑村誌』上巻(同村、一九八八年)七七〇―七七二頁。
- 34 熊谷は一九三八年一月に飛鳥組から独立し、熊谷組(資本金四〇万円)を設立した。
- 35 牧田甚一『熊谷さん』、熊谷三太郎伝記編纂室『熊谷三太郎』(同室、一九五七

- 年)一三〇頁。牧田は後に熊谷組社長(一九五九〜六四)、会長(一九六四〜八六)を勤める。
- 36 牧田甚一「熊谷さん」、前掲書『熊谷三太郎』一三二頁。
- 37 前掲書『流れとともに』一四一頁。
- 38 前掲書『飛鳥建設株式会社社史』上巻、七九頁。
- 39 牧田甚一「熊谷さん」、前掲書『熊谷三太郎』一三三頁
- 40 『信濃毎日新聞』一九一九年一月一六日。
- 41 『信濃毎日新聞』一九二二年二月一五日。
- 42 『信濃毎日新聞』一九二二年四月二日。
- 43 黒岩純泰「大桑工事思ひ出しの記」、前掲書『大桑発電事業誌』六七九〜六八〇頁。
- 44 前掲書『大同電力株式会社沿革史』九八〜一〇〇頁。
- 45 前掲書『飛鳥建設株式会社社史』上巻、九三〜九八頁。
- 46 「年賦」、前掲書『熊谷三太郎』三九頁。
- 47 『信濃毎日新聞』一九二二年五月六日。
- 48 浦西和彦『著述と書誌』三卷(和泉書院、二〇〇八年)一〇一〜一〇二頁。
- 49 前掲書『流れのままに』一〇五〜一〇八頁。
- 50 葉山嘉樹「獄中記(創作ノート)」、金子洋文他編『葉山嘉樹全集』六卷(筑摩書房、一九七六年)一三〇頁。
- 51 『信濃毎日新聞』一九二二年二月一五日。
- 52 『信濃毎日新聞』一九二二年四月三日。
- 53 『信濃毎日新聞』一九二二年四月一四日。
- 54 「高橋知事引継書」(一九二七年四月)、「長野県知事事務引継書」『在日朝鮮人史研究』一二号(一九八三年九月)一〇四頁。この史料は、長野県『長野県史・近代史料編』八卷(一)(同県、一九九〇年)、朝鮮人強制連行真相調査団編著『朝鮮人強制連行の記録―中部・東海編』(柏書房、一九九七年)にも所収。
- 55 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇〇〜一〇二頁。工事の詳細は、前掲書『日本の発電所―中部日本篇』三五〇〜三五七頁参照。
- 56 「年譜」、前掲書『熊谷三太郎』四〇頁。
- 57 佐藤工業一〇年史編纂委員会編『一〇年のあゆみ』(同社、一九七二年)四四一頁。
- 58 『信濃毎日新聞』一九二二年一〇月五日。
- 59 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇二〜一〇四頁。工事の詳細は、前掲書『日本の発電所―中部日本篇』三五八〜三六四頁参照。
- 60 「年譜」、前掲書『熊谷三太郎』三九頁。
- 61 『信濃毎日新聞』一九二二年二月一五日。
- 62 『信濃毎日新聞』一九二三年二月二日。
- 63 『信濃毎日新聞』一九二三年五月一六日。
- 64 『信濃毎日新聞』一九二三年五月一八日。
- 65 『信濃毎日新聞』一九二三年七月二六日。
- 66 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇四〜一〇七頁。工事の詳細は、大同電力編『大同電力大井発電所工事写真帖』(同社、一九一五年)、時任為文『恵那峡―隠れた木曾の奇勝』(電陽社、一九二二年)一二七〜一三四頁、畠山好伸「大井発電所工事に就きて」『電気学会雑誌』四五巻七号(一九二五年三月)五六九〜五七三頁、前掲書『日本の発電所―中部日本篇』三八〇〜三八六頁、恵那市史編纂委員会編『恵那市史―通史編・第3巻(近・現代編二)』(同市、一九九三年)八二六〜八三八頁参照。大量の労働者を使用したにもかかわらず、その実態が明らかではないのは、代表的な地元新聞の『岐阜新聞』が戦災等のため、一九一八年三月から一九三七年二月分が欠落しているためである。
- 67 広瀬貞三「近代朝鮮の水道事業と地域社会」『朝鮮学報』二四〇号(二〇一六年七月)五頁。
- 68 前掲書『流れとともに』二五四〜二五五頁。
- 69 前掲書『大成建設社史』二二八〜二二九頁。
- 70 中津川・恵那広域市行政事務連合組合編『恵那地域誌Ⅱ続恵那郡史』(同組合、一九八八年)三七一頁。

- 71 恵那市史編纂委員会編『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』(同市、一九九一年)一五二―一五三頁。
- 72 前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』一五三頁。
- 73 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇六頁。
- 74 前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』九五一―九五三頁。
- 75 『大同電力大井水力工事工難覚霊塔開眼供難記念絵葉書』(三枚)(広瀬貞三所蔵)。
- 76 二〇一八年八月一〇日、現地を確認。
- 77 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇八―一〇九頁。工事の詳細は、前掲書『日本の発電所―中部日本篇』三八七―三九一頁参照。
- 78 「年譜」、前掲書『熊谷三太郎』四二頁。
- 79 小田切進校訂『葉山嘉樹日記』(筑摩書房、一九七六年)五九一―五九二頁。
- 80 栗谷本茂雄「葉山さんの思い出」、『葉山嘉樹と中津川』(葉山嘉樹文学碑建立二〇周年記念集実行委員会、一九八〇年)四八頁。
- 81 葉山嘉樹「それは何だ」『文芸戦線』三卷三号(一九二六年三月)、前掲書『葉山嘉樹全集』一巻、二五六―二五八頁。
- 82 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一〇九―一一二頁。工事の詳細は、「笠置発電所工事」『土木建築工事画報』一九三七年二月号、一六―一九頁、前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』八五七―八六五頁参照。
- 83 前掲書『流れとともに』三九七―四一〇頁。
- 84 前掲書『二一〇年のあゆみ』一四〇―一四一、四四三頁。
- 85 佐藤工業「憶昔佐藤欣治」編集委員会編『憶昔佐藤欣治』(同社、一九九二年)七一―七二頁。原文は佐藤欣治『未完の記録』(青林書院新社、一九六九年)。佐藤は後に佐藤工業の社長(一九四六―一九八七)、会長(一九八七―一九九二)を勤める。
- 86 前掲書『流れとともに』四一二頁。
- 87 岐阜県恵那郡笠置村教育委員会編『笠置村誌』(同会、一九三八年)二七三頁。
- 88 前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』八五六―八五七頁。
- 89 前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』一五四頁。
- 90 前掲書『恵那市史―通史編・第三卷(近・現代編二)』九六七―九六八頁。
- 91 前掲書『大同電力株式会社沿革史』一一一―一一四頁。工事の詳細は、「寝覚発電所建設工事」『土木建築工事画報』一九三九年一月号、一二―一七頁参照。
- 92 前掲書『流れのままたまに』四三一頁。
- 93 「年譜」、前掲書『熊谷三太郎』五三頁。
- 94 滝正「時岡副社長を偲んで」、『時岡収次追悼集』編纂委員会編『時岡収次追悼集』(熊谷組、一九八八年)二三二頁。
- 95 石山貢「むかしの思い出」、熊谷組悠友会『悠友会回顧録―熊谷組の思い出』(同会、一九八八年)三〇頁。
- 96 前掲書『二一〇年のあゆみ』一四一、四四三頁。
- 97 前掲書『大同電力株式会社沿革史』三七三―三七五頁。中部電力『飛騨川―流域の文化と電力』(同社、一九七九年)五四九―五五一頁。
- 98 問組百年史編纂委員会編『問組百年史・一八八九―一九四五』(同社、一九八九年)四九八―五〇〇頁。この項は広瀬貞三が執筆した。
- 99 前掲書『流れのままに』四六九頁。東邦電力については、東邦電力史編纂委員会編『東邦電力史』(同史刊行会、一九六二年)参照。
- 100 可児市編『可児市史・第三卷・通史編・近現代』(同市、二〇一〇年)二七〇―二七二頁。
- 101 前掲書『問組百年史・一八八九―一九四五』四九八―五〇〇頁。工事の詳細は、前掲書『木曾川水力の歴史』五〇―五五頁参照。問組の主任心得だった小川蔵夫の工事の思い出は、小川蔵夫『回顧録』(政経社、一九六七年)一二六―一五三頁参照。
- 102 前掲書『問組百年史・一八八九―一九四五』四九六―四九八頁。
- 103 可児町民話の会編著『ものがたり可児の百年』(可児町教育委員会、一九八二年)二二〇頁。執筆は山本允子。



- 104 前掲書『朝鮮人強制連行調査の記録―中部・東海編』六五頁。兼山発電所工事に  
関しては、前掲書『木曾川水力の歴史』五六―六三頁参照。
- 105 前掲書『可児市史・第三卷・通史編・近現代』二七三頁。
- 106 二〇一八年八月一日、現地で確認。